東方幻実神

Erius

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方幻実神

【Ｎコード】
Ｎ０４１４Ｚ

【作者名】
Ｅｒｉｕｓ

【あらすじ】
交通事故で死んだ主人公。しかし、その魂は創造神の元に。転生させられた主人公は世界の頂点に立ち、何を見る？　・主人公チート、独自設定等の要素を含みます。　・理想は一日一話、早くて三日に一話、遅いと一週間に一話ぐらいが目安です。／／現在総書き直し作業中です。話の根本を変えたつもりはありませんが、大分別の話になってるので注意。

第一話：世界神の誕生（前書き）

皆さん始めまして。
簡単にですが、いくつか注意をば。
まず、この作品はもともとオリジナル作品の予定だったことです。
要するに、独自設定がすごいです。
次に、これが初作品です。一応書き直しではありますが、初作品です。
多少の粗末な文章、意味不明な点は見逃してくださるとありがたいです。

では、どうぞ。一話でも読んでくだされば幸いです。

第一話：世界神の誕生

不運にも交通事故で亡くなった一人の男がいた。

特に出来ないこともなく、しかし完璧にできる物は無い、平均的な男だった。

彼の魂は偶然か必然か、幸か不幸か、世界を司る創造神の元へ流れ着いた。

これは、そんな彼の非常識に満ち溢れる物語。

〜〜

……ここは一体どこなのだろうか？

何もなく、真っ白の様でも真っ黒の様でもある不気味な空間だ。

しかもよく考えれば、感覚が全く無い。

あるはずの腕、足、頭……どれも、無い様に感じる。

もしかして、本当に無くて、この光景も見えているわけではないのだろうか。

「おや……珍しいね」

声が聞こえるような気がする。あるかないか分からない今、全てが曖昧だ。

「なんだ……？」

俺が何か喋った気がする。

「喋れるのかい？」

「しゃべ……れる……？」

喋ったような……いや、喋った！

俺は今確実に喋った！

それを認識した時、全ての感覚が戻ってきた。

見えるし、動かせる！

俺の目には確かに自分が映り、目の前には男がいた。

周りは真っ白で何もない。

「……驚いたよ、まさか魂なのに実体化するとはね」

ファンタジー物によく出る神のように白い衣装を纏っているその男は、驚いたようにそう言う。

「なぁ、ここはどこだ？」

だが俺はそれを気にせず、思ったことを口にする。

……後から思えば、放心状態だったのだろう。

「……こんなのは初めてだよ。特別に、教えようかな」

そう言うと一呼吸置き、説明し始めた。

「ここは連結空間、何もない場所だ。しかし、全ての世界はこの空間に繋がっている。
全てのために無くてはならない場所だよ。そして、創造神の僕の”仕事場”でもある」

「どういう意味だ？」

「僕の仕事は、君みたいな珍しくここに迷い込んできた魂をどうにかするのが一つ。
全ての世界を管理して、新しく創ったり消したりするのが一つだ。
最も、君みたいなのはあんまりないから実質仕事は１つだけどね。」

「うーん……」

「ああ、全て理解しようとしなくていいさ。多分無理だからね。
それに、もしかしたら後で理解できるかもしれないし」

意味が、よく分からない。
掴めたのは大まかなことだけだ。

「さて、これから選択をしてもらおう。
……喋れない魂しかいなかったからちゃんと選択させるのは初めてだよ。」

「選択？」

「そうだ。……君には、２つの選択肢がある。
まず一つ、このまま本来行くべきだった場所へ行く。君たちはあの世って言ったっけ？
もう一つ、新しく創った世界の神を務める。丁度今創ろうとしているところだよ。
正直に言えば、人手不足なんだよね。いくら世界が増えても、管理できるのは僕だけだからね」

「……創らなければいいんじゃ？」

「残念ながらそうも行かないのさ。確かに、誰かに命令されてるわけでもなければ、
強制的に創らされてるわけでもない。でも、やらなきゃいけないんだよ。”そうなってる”からね」

「……わからん」

「まあ、そんな話は置いといて。選択を頼むよ」

ぶっちゃけ、こんな選択肢出されたら選ぶの決まってると思うんだよな。
もちろん……

「その選択肢なら、俺は後者を選ぶ」

「……うん、わかった。準備を始めるから、ちょっと待っててくれ」

俺は座って待つことにする。

ところで……何故俺はこんな状況でありながら考えられるんだ？
普通なら考えるのをやめてもおかしくない状況なのに。
死んだから？関係ないだろう。そんなことは微塵も考えていなかった。
まぁ、考えて分かるようなことでも無さそうだし……

「……よし、これで終わりだ」

向こうも終わったみたいだし。

「ああそうそう、君にはこの本を渡しておく。役に立たないことは無いと思うから。
……それじゃあ、あそこへ行ってくれ」

「ここか？」

「そこでいい。……最後に、名前を聞いてもいいかい？」
「応条順時（おうじょうじゅんじ）だ。どうせもう使わないと思うがな……」

「それじゃあ、ありがとう、応条順時。生憎僕には名前が無いんだけれどね。
またいつか会えたらうれしい」

「そうかい」

そうこう言っているうちに、俺は光に包まれ始めた。
正直なところ、これからどうなるのかさっぱりわからないし、
こいつの言ったこともよく分からない。

だけどまぁ……

「できるだけ、楽しむとしますかね」

そう言い残し、俺は消えた。

さて……どうするかなぁ。

周りは木一つ無い果てしない草原。地面が無ければ、さっきの場所とあんまり変わらないな……

そもそも、俺はどうすればいいのだろうか。

確か世界の神とか言われた気がするが……

ん？……ふむ。

適当な場所に移動、地面を引っ張るイメージで……

「それっ！」

ドゴォン！

「うぐっ」

な、なんだ……力が入らな……

起きると、朝だった。
”今は太陽が沈んで出てきた時”と頭に浮かぶので、多分一日経ったのだろう。

しかし、昨日のはなんだったのだろうか？
本能的にと言うか、感覚でやっただけなのだが……
目の前に馬鹿でかい山が出来てるし。
うーん……ああそうだ、本。
基礎的なことぐらいは、書いてあるだろう。

能力について
この世界で能力とは、人によって持ってたり持ってなかったりする固有の物だよ。
世界の頂点に位置する君なら確実に持ってるとは思うけどね。それもすごい物を。
とりあえず、目を瞑って能力と念じればいい。名前だけは分かるから。
何が出来るかは、やりたいことをイメージしつつ力を込めればいい。
手なんかを使ってやるとイメージしやすいと思う。

最初のページ。こんな物もあるのか……完全にファンタジーだな。
今の俺の存在が既にファンタジーだから今更だけど。
目を瞑って……集中。

『現実と幻想を操る程度の能力』

……本当に名前しか分からないｎ
いや、待て。この感覚は、さっきのと似てるな……
もしかして、この山も能力で創ったのか？
……神っぽく何でもできる物だったりして。ただし、力は半端なく使うとか。

いろいろ試した結果、その通りだった。力を半端無く使うことまで含めて。
５つ試そうと思って７日もかかるとは思わなかった。
とりあえず、読書しよう。もう倒れるのは嫌だ……

無事読破。ただし１日ぶっ通しで。やっぱり夜って暗いんだな。
さて、力について確認してみよう。
さっきまで力と言ってはきたけど結局なんだかわかってないし。

目を瞑って集中。今度は力をイメージする。
……白い何かと紫の何かがあるようだ。
具体的に何とはわからないが、取りあえず二つ持っているようだ。
これ以上のことは書いてなかった。自分で考えろと。当たり前か。

普通の腕力とかと混ざって紛らわしいからこっちはこれから気とでも呼ぼうか。
正式名称を俺が決めれば早いんだが適当につけるのもいやだしな。

そういえば、俺以外に誰もいないのだろうか？
世界の始まりだし居なくてもおかしくはないが、世界が違うからといって特別に何か違うことはないらしい。
つまり、日本神話とかが実在する可能性も無いわけではない。
最も、神話なんぞほとんど知らないのだが……
まぁ、暇になったら何かしてみよう。

後は、取りあえず住処だな。草の床で寝るのも慣れてきたが、やっぱり何か欲しい。
とは言っても、何もないのだが……っと、そういえば目の前に山があったな。
穴でもぶち開けて住むか。力も人間だったときに比べて物凄い強くなってるみたいだし。

ってことで。

「そいっ！」

ドコッ！

……ふむ。確かにこれは強い。人が入れる程度の洞穴が作れるとは。
でも、よく考えたら置く物ないな。木があればいいのだが……
しょうがない、創るか。

木を一本創りだす。何の木かは分からないが、繁殖してもらおう。
その時間さえ耐えれば、何とかなる。その間気についていろいろやってみるか。

第一話：世界神の誕生（後書き）

言葉にかなり悩みました……もっといろんな言葉知らないと駄目ですね、はい。
一行書くのに１０分悩むとかありました。これはまずい。

第二話：天照大御神（前書き）

日本神話入りします。一億年ぶっ飛ばします。原作キャラ出ます。最初のはあらすじのようなものです。毎回つけるつもりは無いですが。

第二話：天照大御神

成り行きとはいえ世界の頂点に立つこととなった主人公。
もちろんほとんど何も無いその世界で、木を一本創りだす。
この原始の世界に、何を見る？

木を創りだしてからおよそ１００年経った。
木は２０本程になった。早いのか遅いのかわからないが……
寿命が無いも同然だからだろうか。この１００年は長いようにも短いようにも感じる。
もう人じゃないなぁと今更なことを考えながら、修行する。
修行とは、気と能力の修行だ。
気は使えば増える。使い方も分かってきた。
能力は使えば慣れる。ただし、気を使うので増えないと倒れるのは仕方ない。
今はまだ増やすときだろうが、もう少ししたら頭に浮かんでいる気の使い方をやってみようと思う。
……とは言うものの、ずっと同じことをやっているので暇になる。
なので、前に言ったように誰か居ないか探しに行こう。
やはり１００年程度ではほとんど変わらない。いつの間にか山の近

くに湖が出来ていたときは驚いたが。
と、歩いていたところで。
「貴方は誰？」
いつの間にか後ろに誰かいた。
「……俺は……」
応条順時と言いかけて、止める。
これは前の世界での名前だ。
「刃勇流英だ」
なので、ふっと頭に浮かんだ名前を言う。
「そう。私はアマテラス。ここ高天原を治めているのよ」
アマテラス、と言うと……
「天照大御神？」
「そうとも呼ばれてるわね。貴方は何をしにきたの？」
「探索だ。俺はあっちの方に住んでるんだが、誰も居ないからな。暇なんだ」
「そうなの。でも、ここも私以外誰もいないから暇な物よ？」
「俺としては話せただけでうれしいよ」

……ん？

「おい、誰か来るぞ？」

「……ッ、まさか」

遠くに、誰かがこちらに向かって歩いているのが見える。

「ここを奪いにきたのかしら？だとしたら……」

「いや、待て。敵意は無さそうだぞ？」

だんだん近づいてきているが、敵意を全く感じない。

「何か構えてるわけでもないし……」

「……本当ね。治めるっていう言葉を重く感じていたのかしらね」

そういうことで警戒をやめ、待つ。

やがて目の前に来ると……

「あら、スサノオじゃないの」

「やぁ、アマテラス。そちらの方は？」

「刃勇流英だ」

「この人はさっき来たのよ」

「そうか」

と、こっちに来て微笑みつつ。

「初めまして、僕はスサノオと言う。アマテラスとは兄妹だ。僕が弟だけどね。

もう一人、ツクヨミって言う兄が居るんだけど……どこに居るか分からないんだ」

「あぁ」

全部どこかで聞いたような名前だな……まぁいいか。

「さて……僕はもう行くとするかな。ここに来たのは挨拶するためだし」

「あら、遠い所にでも行くのかしら？」

「ご名答。どことは言わないけどね。それじゃあ」

そう言い、スサノオは去っていった。

「さて、俺も帰ろうかな。こうして話したのは久しぶりだ」

「一気に寂しくなるわね」

「何を言うか。この時代で、何人も一緒に居る事自体が珍しいんだよ？」

「まぁ、それもそうね。また会いましょう」

「あぁ」

微笑むアマテラスに見送られつつ、俺は帰っていった。

ということで着いた我が家。
隅には１００年分の日記がある。
紙……というか白紙の本は、能力で創らせてもらった。修行目的に。
この能力は便利すぎるのであまり利用したくないのが本音だが、
本なんぞ今から何年後に出来るかわかったものじゃない、
ということで仕方なく。言い訳にしかならないが。

さて寝よう、いつの間にか日が暮れている。
能力の安定はいつのことやら。明日も明後日も、修行だな。

気がつけば1億年。果てしないと思っていても、意外とすぐに過ぎる物だな……
もちろん変化は大量にある。
作り出した木は枯れることなく成長し続け、大木になった。
しかも、そこから広がっていった木々は森と言っても良いぐらいに広がった。
火山が噴火したりして地形に凸凹ができたし、どこからか水が出てきて川もできた。
人間どころか猿も居ないが、かなりの変化があった。
悲しいのは、相変わらず話す相手が居ないことか。

もちろん俺自身にも変化はある。
気は増加したし能力も少しは安定してきたが、
一番は『術式』を開発できたことだ。
最初にアマテラスに会った年の１０年後ぐらいから開発に取り掛かっていたのだが……
なんとか完成した。あとは、修行して安定させるのみだ。
この術式は気を精密に操って式を作り、何らかの効果をもたせることができる物だ。
式なので複雑な物は相当に精密で複雑になるが、その代わり成功すれば安定する。
うまくやれば単純に気を使ってやるより消費が減るし、効率もよくなる。
もちろん難点は、難しさなのだが。

そういえばあの後分かったのだが、アマテラスが居た高天原は天界と呼ばれるところにあったらしい。
で、俺が通ってきた道は天界と地上を繋ぐ道だったらしい。
偶然にも程があるだろう……

さて、これから神社を建てようと思う。
何時までも洞穴はなんだか悲しいし、個人的に神って言うと神社だし。
１００年ほど前から計画はしていたので、準備は万端だ。
場所は、湖の近くだ。とは言っても山の近くの湖ではなく、別の場所の湖だ。
理由はいろいろあるのだが……今はいい。

建設完了！特に何も起こらなかったので過程は割愛する。

本殿から鳥居まで建ててておいた。人がいない今意味はないけど。
朽ちないように保護の術式をかけてあるので、人が出る頃までもってくれるとありがたいのだが……

荷物は日記のみ洞穴に置いてきた。封印付きで。
ぶっちゃけ、多すぎるのだ。圧縮の術式をかけても一部屋潰す程度にはある。
止める気はないが。書かないつもりでも無意識に書く程度には慣れてしまったからな。
封印かけたのは、無くしてしまうのは惜しいからだ。
術式のテストも兼ねているが。だめなら、いずれ封印が自然消滅するか誰かに解かれるだろう。

出かけようか……と思ったが、日が暮れてきたので明日にしよう。

とまぁ翌日。朝飯食ってさっさと行こうそうしよう。気になって仕方が無いのだ。
今更だが、生活自体は人間の頃とほとんど変えないで過ごしている。
世界になんかあったりすると全力で取り掛かるので全然変わるが。

さて、やってきたのは山の近くの湖。神社の近くじゃない方。
結構気になることがあるのだが、何となく来れないでいたのだ。
気になることとは、山に居てもわかるぐらいの強さの気を感じるのが一番大きい。

さて……何が出るのやら。
湖に近づいていくと、途端に何故か霧が深くなってきた。
ふむ……まぁ、この程度なら見えないことも無い。
……と、なにやら人影が見えるが……

「誰か居るのか？」
呼ぶように言うと、驚いたようにビクッとした後、
「誰だ！ここはあたいの湖だよ！」
と言った。
明らかに敵意を向けられているな……
「落ち着け、俺は怪しい者じゃない。とりあえず霧を晴らしてくれ、見えない」
「見えないのは仕方ないわね……特別に晴らしてあげるわ！」
さぁっと霧が晴れていき……
少女が現れた。
「妖精か……ん？妖精？」
妖精にしては、気の量が物凄く多い気がする。
その辺の森でも時々見かけるが、ここまで大きいのは見たことが無い。
「ぐっ、何と言われようがあたいは妖精よ！」
若干涙目になりつつ大声で言われた。一体何が……
「お、落ち着いてチルノちゃん？」

また何か現れた。やはり妖精のようだ。
こちらはこちらでなかなか強いな……
状況が把握できないのだが……何があったのだろう？
「なぁ、何が……」
「ああ、すいませんそこの方。
チルノちゃんの前で妖精に関しての話は控えてもらえるとありがたいです……」
申し訳無さそうに頭を下げて言ってくる。
まあ、事情があるなら仕方がない。断る理由があるわけでもないしな。
「……ああ、わかった」
少し様子を伺っていると、やがてチルノと呼ばれた妖精が立ち直ったようだ。
そして……
「お前、結局何しに来たんだ？」
「何があるか見に来ただけだ」
「じゃああたいと勝負しなさい！」
「は？」

前後の文が繋がってない気が……

「この状況で平然としてられるってことは強いんでしょ？あたいは最強になるんだから！」

うん、わからん。妖精の括りで言えば十分最強なのだが……

まぁ、深く考えずに相手をしようか。

「わかった、いいだろう！かかってこい！」

さて、がんばろうかな……

第二話：天照大御神（後書き）

アマテラスはいつかまた出てきます。多分。
スサノオも出てくるかも。

第三話：実戦経験なんてありません（前書き）

タイトル通り。先に言っておきますと、結構無理矢理に展開を引っ張りました。

第三話：実戦経験なんてありません

ふむ……

よく考えてみれば、俺は今武器なんぞ持っちゃいない。
ついでに、力と気はあるけれども実戦経験も無いに等しい。
挙句、チルノは強い気を放っている。
あれ、負けてもおかしくないよなこれ……

チルノは氷を固めた棒……いびつだが剣か？それを構えている。
対して、俺は素手だ。
能力を使ってもいいのだが、あまり時代に合わないものは出したくない。消費も激しいし。

「いくわよ！」

そのかけ声と同時に、氷は俺の目の前まで来ていた。
……速い！

「チッ……せいっ！」

受け流しつつ、カウンターを入れる。

「ぐっ」

だが、その勢いで何回も斬りつけて来る。防ぎきるのは不可能だ。
どちらかと言うと殴られているのでスパッと切れたりしないのが幸いだが。

……打撃ならいけるか？

「……これだっ！」

ガンッ

「あっ」

手に気を込め、氷の剣を殴って弾き飛ばした。
この隙を逃すほど馬鹿ではない。

「今度はこっちの番だ！」

武術の心得はないので適当になってしまうが、殴る。
回し蹴りからの回し蹴り。浮いたところに滑り込み殴り上げる。
後は……

「っ……これ以上させるか！凍れ！」

ガキン！

蹴りは、突然現れた氷により防がれる。
チルノはその隙に距離をとり、気を集めて……

「食らえ！パーフェクトフリーズ！」

すると、チルノから弾幕が放たれる。
そして……弾幕が止まる。

「……？」

「今だ！アイシクルマシンガン！」
と、弾幕が動くと同時につららが凄い速さで迫る。
「っ……なかなかきついな……」
気を集めて盾にし、ダメ押しで即席術式結界を貼る。
弾幕は弾かれていくが、即席結界も壊れていく。
「まだ試してないけど……仕方ない」
俺は盾とは別に手に気を集め、形を形成し放つ。
白のその弾丸は、いくつもゆっくりと進む。
「相殺弾丸！」
速度の遅いその弾丸は、チルノの弾丸やつららに当たると同時に消し去った。
「何！？」
「終わらせるぞ！」
突破口を作り、チルノへ殴りをかます。
「ぐぅっ」
「破壊の拳！」

ある程度破壊に特化した術式を拳にかけ、もう一発入れる。

「まだだよっ……」

チルノは氷を創りだし、抵抗する。

だが、破壊に特化したこれを防ぐには力不足だった。

バキッ！

「がっ……」

チルノは吹っ飛んでいった。おそらく、もう戦闘不能だろう。

吹っ飛んだところでは、チルノが泣いていた。さっきのもう一人の緑髪の妖精もいた。

チルノの近くにしゃがみこむ。妖精は何も言わなかった。

チルノは何か言っているが、正直なところさっぱりわからない。

「……チルノちゃんは」

と、そこまで黙っていた妖精が口を開く。

「チルノちゃんは、群れから追い出されたんです」

「……へ？」

「もともと私達妖精は、非力で無知です。でも、チルノちゃんはそ

のどちらもあった。
単純な思考の妖精が取る行動は簡単でした。追い出すことです。
お前は妖精などではない、と、何度も……っ」
この事実に、俺は黙っていることしか出来ない。
こんな状況で、なんて声をかけたらいいのか、俺には分からない。
やがてまた話し始めた。
追い出された彼女は、力を求めた。
それは追い出した奴らに向けるための物ではなく、単純に最強を目指すため。
なぜそう思い至ったのか分からないが、妖精として生きることを捨ててまで目指そうとした。
しかし、妖精だと言い張ることは絶対に諦めなかった。彼女なりのプライドがあったのだろう。
緑髪……大妖精と言うらしい。
彼女にもチルノの行動原理と考え方はほとんど分からないが、支えになりたいということで付いていってるようだ。
「……今更だけどさ、俺みたいな見知らぬ奴にそんな事言っちまっていいのか？」
「いいんですよ。ただの自己満足ですけれどね。事情を知られて困ることもないですし」
ああなるほど、妖精を、群れを捨ててまで得ようとした『最強』を俺がへし折ったのか。
ならば、責任を取らなくてはな……

「なぁチルノ」

「……なによ」

「俺の修行に付き合わないか？」

「……え？」

要するに、俺は不可抗力とはいえ彼女の上に立ってしまったわけで。
ならば、手伝うぐらいはしなければならないだろう。

「まともに戦いをしたことの無い俺。でもその俺は勝ってしまった。
別に俺はお前に、俺が最強だと言いに来たわけじゃないのにな」

「……やるわ」

「……ああ、わかった。いつか俺を、超えて見せてくれ」

チルノは俺の修行に付き合うの決定。
後は……

「大妖精、お前はどうするんだ？」

「ついていくに決まってるじゃないですか。私はチルノちゃんを支
え続けるって決めたんですから」

「……ああ、そうだ。ここを離れられるのか？妖精は離れられない
と聞いたが……」

「私達を縛るものは、持った力で消えました。ですので、どこへでもいけます」

「なるほどな……じゃあ最後に。お前達は、妖精でいたいか？」

「「もちろん」」

「じゃあ、ちょっと待っててな」

根本的にいろいろするのは俺じゃ力不足だ。だが、力を抑えることぐらいはできる。

２つのリボンに、複雑に術式を書き込んでいく。こういう時は能力に感謝したくなるな……

「……よしできた。頭にこれをつけな」

素直に、付け始める。チルノには青いリボン、大妖精には黄色いリボンを渡した。

と、みるみる力が抑えられて減っていく。

「俺の力じゃこの程度しか出来ないけどな……力ぐらいは、妖精になれてるんじゃないか？」

「ありがとう！……でもこれじゃあ最強を目指せないよ？」

「外せばいい。でも、基本的につけていれば、少なくとも妖精に見えるさ。若干身長も縮んでるぞ？」

「え？……あ、たしかにあんたが大きく見える」

「まぁ、それじゃぁ家に帰るとしよう……っと、忘れてた」
自己紹介をしていない。
「俺は刃勇流英、ただの神だよ」

「いやしかし疲れたな……」
3人で家に帰ってきた。話し相手がいるってこんなに素晴らしいことなんだなと思ったりもした。
「おーい、部屋は有り余ってるから好きな部屋使っていいぞー」
畳の上で転がりまわってる2人に声をかける。
建設の時、必要な場所以外は全て空き部屋にしたので有り余っているのだ。
何部屋か日記の保管場所にして潰しているが、それでも5部屋以上はある。
ここは宿か。神社だよ。

翌日。あの後、もう暗かったので寝た。木炭に術式をかけて、それに火をつけたものぐらいしか光源がない。
ろうそくでもあるといいんだがな……まあ、それはどうでもいい。
それより朝食だ。もちろん俺が作る。
「なにやってるの～？」

と、においに誘われたのかチルノが来る。

「朝食作ってるんだ。大妖精はどうした？」

「いろんな場所見て回ってたよ」

「そうか。まぁ、そのうち来るだろう。……っと、もうそろそろできるぞ」

献立はご飯に焼き魚、味噌汁だ。
味噌だけ自分で出したが、それ以外は全て自分で取ってきた物だ。
全部今の物だけでやろうとするとただでさえ単調なのが余計にひどくなる。
許してほしい。

木を削って作ったちゃぶ台に配膳し終えた頃、大妖精が釣られたようにやってきた。

「……あ、そういえばお前達箸なんて知らないか」

と、ここで重大なことに気がつく。今更である。

何とか教え、こんどこそ……

「「「「いただきます」」」」

第三話：実戦経験なんてありません（後書き）

チルノの理由が全然思いつかず、散々悩んだ挙句こんな出来に。
いつかいいのが思いつけば、編集しようと思います。
取りあえず今は最後のあたりがやりたかっただけと思ってください。

第四話：修行の日々（前書き）

今回は最初に、あらすじでもありますが、流英の日記を書いています。
５ｋｂだったので、ちょっと短めだと思います。微妙に書き方を変えたせいもあるか……？

後、書き終わった後に全員容姿について触れてないなと思いました。
いつか番外編で出します。

第四話：修行の日々

まともな生物が居なかったこの世界で、俺ははチルノたちに出会う。

そこでは、強すぎる力は時に己をも滅ぼすことを観た。

俺はそんな彼女達に手を差し伸べた。しかしそれはやっていいことだったのか？

世界の頂点に立つものとして考えて、だが。

とはいうものの、俺には世界の頂点が何なのか分からない。

全ての出来事の責任を負うべき存在？何も気にせず気ままに突っ走る存在？

……まぁ、悩んで分かる物でもないか。

――某日の日記より

「こうだ」

草地に座り、朝日に長い銀髪を光らせる男が居る。

「……こう？」

その男を向いて座る、青い髪に青いリボンをつけた少女が一人。
「大体そんな感じだ、もう少しやればできるかな。一旦終わるぞ」
……まぁ、ご存知流英とチルノだ。
俺達は今、修行をやっていた。
とは言うものの、俺には戦闘技術がないので教えるのは術式だが。
「あー疲れたぁ……」
「まぁ仕方ない、最初はそんなもんだ。コントロールできないうちは気を垂れ流してるようなものだしな。
さて、飯作り始めるから俺は行くぞ」
自慢するつもりはないが、今までずっと飯を作り続けてきたので大分うまくなってると思う。
ある意味不可抗力。嬉しいやら悲しいやら。
厨房に着く。とは言ってもかまどと台がある非常に簡素な部屋だ。
包丁ぐらいは欲しかったのだが、さすがにもう記憶が薄れてきていたので駄目だった。
イメージが大事なこの能力、名前だけ覚えていても役に立たないのだ。
「さて、今日はどうしようかなと……」

「「「ごちそうさまでした」」」

さて、朝食も食い終わったし、どうしようかな……

「あの、流英さん」

「ん？」

「いろんな部屋に、たくさん本があるんですけど……読んでもいいですか？」

ふむ、読みたいときたか。

別に日記程度読まれても問題はないのだが……

「別に構わん……が、大妖精って、字読めたっけ？」

「……字？」

そうきたか畜生。

仕方ない、全部教えるとしよう。

時代を先取りしてるけどこの程度許して欲しい。

……誰に言ってるんだ俺は？

とりあえずひらがなは全部教えておいた。覚えてるかは別として。

こりゃ、チルノの修行と並列してやるしかないかな。

……とは言うものの。

「あー、昼のこの時間は暇だなぁ」

昼になると逆にやることが無くなる。
チルノやる気あるかな……
「おーい、チルノー」
「なにー？」
取りあえず呼ぶ。
「修行やる気ある？」
「やる！」
やる気と喜びに満ち溢れた笑顔を向けられる。
やばい、眩しすぎる……ってそれはどうでもいい。
「……聞いといてあれだけど無理するなよ？」
「大丈夫よ！あたいは最強に近づくならどんな努力も惜しまないわ！」
本当に惜しまなそうだ。誰かにそそのかされたらあっさりついていきそうなぐらい。
……っておい、何を言うか俺は親じゃない。え？保護者？……うがー！
「……大丈夫？」
俺は心配されるほどの顔をしていたか。

「……スマン」

取りあえず謝っておく。さて、気を取り直して修行と行こう。

「ふっ」

硬い木を削って作った剣を振る。

剣と言っても、具体的な形は忘れたので適当だ。

たかが木、されど木。切れ味は悪くない。

むしろ、下手に石を削った物より軽くていいと思う。

……いや身体能力的にどっちもほとんど変わらないけど。なんて無駄な力。

「うーん……」

チルノの方は、基礎を極めさせるために一人で練習させている。

数学も似たような物だった気がするが、基礎が超大事。ぶっちゃけ後は応用で何とかなる。

基礎がわかるできるではなく、究極を目指してもらう。無論俺も極めちゃいないが。

という感じでやっていたが、折角二人できたのに個別と言うのは意味がないので……

「チルノ、どうだ？」

「この式のここが複雑で分からないのよ……」
困惑した顔をこちらに向けつつ、指し示す。
「あー、それは別のやり方があるんだ。ここをな……」

こうして、昼は過ぎていく。

日が暮れた頃、神社に着いた。
「ただいま、大妖精いるか？」
「ここにいます。それより、さっき向こうの森に何か居ましたよ？」
「ん、そうか、珍しい。明日見に行くとしよう。さて、寝るぞー」
明かりは松明しかない暗い中、俺達は寝る用意をする。
もう少し高度な物が出てくれば活動できるんだがな……

特に言うこともなく翌日。修行、朝食。
今日は、昨日の通り森の様子を見に行く。
まともに生物が居ない今、何か居ると言うだけでも結構珍しいことなのだ。
「お前達、来るか？」
「「もちろん」」

「そうか。じゃあ、行くぜ」

鬼が出るか蛇が出るか。行くとする。

入り口到着。

「うーん、やっぱり相変わらず大きい森だ。自分で創ったとはいえここまで広がるとは……」

「え！？　この森って流英さんが作ったんですか！？」

「まあ似たようなもんだ。勝手に育ったって言うのが正しいが」

「ほへ～」

驚いてるのか感動しているのかよくわからない顔をしている。いや感動されても困るんですが。

「……行くぞ？」

「……おや、あれかな？」

遠くに、動く影が見える。人型をしているが……

「取りあえずそっと近づくぞ。いいな？」

「「はい」」

接近することが出来た。容姿は……長い金髪、黒い服だ。瞳は赤いように見える。

「そこに居るのはどちら様？」

「ひっ！？」

こちらを向いて全力で怯えている。なんか悲しくなって来るんだが……

「……一応喋れるのか？」

「あ……喋ってる……」

話が合わない。どういう意味だ。喋って悪いか。

と、ふざけ半分で聞いていたのだが……

次の言葉に凍りつくこととなる。

「人間なの……？」

第四話：修行の日々（後書き）

次回、原作キャラ登場。
とは言うものの、簡単ですよね。

今回は何となく速く書けた気がします。ペースが維持できればいいんですがね……

第五話：増える居候（前書き）

居候一名追加！

後、全体的に時間の流れが速いのは仕様です。取りあえず、人間を出したい……

第五話：増える居候

「人間なの……？」

「……」

人間？人間だと？

「ど、どうしたの？流英？」

「っ……いや、大丈夫だ」

チルノの一言で、我に返る。

「私何か変な事言ったかしら……？」

「いろんな意味で問題ありすぎるよ……なぁ、一つ聞きたいんだが……

白い衣装を纏った男、と言って思い当たる奴はいるか？」

「ええ、知ってるわよ？なんか何もないところで……」

「わかった、もういい。いろいろ言いたいけどそれは後だ。ついて来い」

「……？　分かったわ」

と言うことで、悩んでいるチルノと大妖精も引き連れて帰ることにする。

どうするべきか……

到着。昼過ぎだ。

「チルノと大妖精は遊んでてくれ。
ちょっと聞きたいことがあるんだが……」

「何？」

「ここがどこだか分かるか？　後、自分のこと」

「う～ん……私、気がついたら何も無い変なところにいたのよ。
で、なんか変な男が来て……」

要約すると、
連結空間に飛ばされた。創造神が見えると言うことは俺と同じく珍しいのだろう。
で、珍しい繋がりかわからないけどここに送られたと。
『一度起こると何度もあるんだね』とか『二度あることは三度ある……だっけ？』とか
考え方によっては不吉な言葉も出てきたが。

彼女自身は、ルーミアと言うらしい。前の世界の記憶が中途半端になっているらしく、
名前を忘れていたらしい。ルーミアはその場で思いついた名前だそうだ。
ついでに、妖怪らしい。今の時代、まともな形をしてる妖怪なんて珍しい。

「……はぁ。それじゃあ、俺からはここの説明をするとしよう」

今度は、こちらから説明。

この世界について、俺も転生してきたこと、俺についてなど。

何となく、神なのは伏せておく。

「……信じがたいわね」

「前の世界がどうだったかなんて忘れたけど……確か、こんな事は出来なかったはずだ」

と言って、気を使って火をつけてみたりする。

「わぁ、すごい！　確かに、こんなことはマジックとかじゃなきゃ無いわね」

「マジックか。聞き覚えはあるけど、もうどんなだかは忘れたな。

さて、それよりだ。この世界で暮らすからには、いろいろ身に付けてもらわなきゃな」

修行三人目。暇だからいいけど。

さて、適当に教えたところで……

暇になる。やることが重なる事もあるが逆に言えば暇が重なる事もある。

暇つぶしに術式組むかー、と思い……

「……そういえば」

『気』に具体的な名前をつけていないのを思いだす。

今のところ気の種類は三個知っている。
一つは大概の事は出来るが弱い物。
一つは攻撃的で強い物。
一つは自然から出来る物。
最初の二つは持っているので分かるが、最後は持っていないのでよく分からない。
取りあえず、妖精が持っているのは分かるが。自然が実体化したようなものだからだろう。

真ん中のはすぐに思いついた。妖怪が持つから妖力。
最後のも思いついた。妖精からとって妖力だと被るし、自然力と言ったら語呂が悪い。
何となく魔法使いが使うような印象も受けたので、消去法で魔力とした。
問題は最初。今のところ俺と極一部の生物しか持って居ないようなので、何ともいえない。
……これが『気』でいいか。区別できればいい訳だし。何か思いつけばそう変えればいい。

そういえばもう一つ。今さっき特徴を挙げたけど、片方だけ使ったことが無いな。
ちょっとやってみようか……

日が暮れてきた頃。

「む、難しい……」

物凄く難しいことが発覚した。

同時に出すなら問題はないのだが……

例えば、気のみに命令を送ろうとすると妖力にも命令が行ってしまう。

長い間混ぜて使っていたせいか、完全に混ざっているのだ。

……前に飛ぼうと思って飛べなかったのもこのせいか。確かに妖力の性質上単純な飛行には使えない。

妖怪なら別なのだろうが……俺は妖怪じゃない。結構器用貧乏なんだな……

何でも出来るって、難しい。

帰宅。これは、意外とまずいことかもしれないと思いつつ。

ただの力馬鹿なら別だ。しかし、俺はそんなに気やらがある訳ではない。

少なからず技術が必要になる俺にはきつい物がある。

ということで、寝ることにした。分け終わるまで。

寝るときこそ、一番自身のことを調べやすいのだ。外から何も受け付けないわけだからな。

……が、ぶっちゃけ何年かかるか分からない。あの三人にここをまかせっきりで大丈夫だろうか？

大体の物に特定の事しか出来ないよう術式はかけてある。家事自体は大妖精が意外とできる。

問題は修行だ。三人には教えることが結構ある。力はともかく知識としては経験が結構あるからな。

「うーん……」

「どうしました？」

と、大妖精。

「いや、長い間家を空けたいんだけどね……お前達の修行をどうするかと思ってね」

「えぇっ！？　何故いきなり！？　どこに行くんですか？」

そこまで驚くかい。いや確かにあんまり自発的な行動はしなかったけど。

「別にここが飽きたとかそう言うわけじゃないから安心しろ。
後、空けるってそっちじゃなくて……まあ単刀直入に言えば寝る。
だから一応はここにいる。理由としてはちょっと俺自身に問題があるから」

「そうなんですか……修行についてはチルノちゃんと相談したほうが言いと思います。
一番修行らしい修行を受けているので……」

修行らしくなくて悪かったな、とは言わない。
だって字の読みと常識の学びだし。仕方ない。

「それもそうだな……ちょっと行ってくる」

「えええっ！？　あたい何か悪い事したかな？　あ、そういえばこの前お皿が欠けちゃったような……」

「ああ、この前のってチルノだったんだ……別に愛想をつかせて出て行く訳じゃないよ。ちょっとね……」

大妖精にしたような説明をする。

「しゅ、修行はどうなるの？」

「それを相談しに来たんだ。いろいろ本に書いて渡すぐらいなら出来るが……」

「……流英の事情だもん、仕方ないよね。あたいはそれでもいいわ。ただ……起きたら、ずっと付き合ってもらうわよ！」

「分かってるよ。じゃあ、飯にするとしよう」

「「「「いただきます」」」」

「流英って、料理上手いのね。昼ご飯の時も言ったけど」

「長い間生きれば、自然とこうなるさ。最も、俺自身は上手いと思わないがね」

「謙虚ねぇ。プロの料理人並みに美味しいわよ」

「「「プロ？」」」

「あれ、流英まで……まぁ、すごいってことよ」

そんな会話で時間は過ぎていき……

「それじゃぁ、寝るからな。結界何重にも貼っておくけど、触るなよ？

何か重要なことがあれば……これに気を流してくれればいい」

そう言って、黒い玉を渡す。気なのは、名称については話してないからだ。

「わかったわ」

チルノは、悲しいような寂しいような、そんな表情だ。

大妖精は、心配そうな表情。

ルーミアは、なんとも言えない表情だ。会って一日なんだから当たり前か。

……というか、死にに行く訳じゃないんだからそう言う顔はやめていただきたい。

そう思いつつ、布団にもぐった。

退屈。この頃思うのはそればかり。

流英が寝てからと言うもの、虚無感を時々感じる。

あたいはそこまで依存していたのかな？

実際に流英といたのは１００年かそこらなのに。

ちなみに、今は寝てから５０００年ほど経った。
もらった本は大ちゃんに手伝ってもらいつつ読み終わっている。

「大丈夫？　チルノちゃん」

「……うん。修行でも、しようか」

最近は大ちゃんとルーミアと修行をして退屈を凌いでいる。
大ちゃんはある程度術式が使えるようになって、あたいは字がある程度読めるようになった。
ルーミアは、持っている力が違うせいか上手く教えられなかった。
字は、既に読めたみたいだけど。
はやく、起きないかなぁ……でも、時々様子を見るけどまだまだかかりそうなんだよね……

第五話：増える居候（後書き）

次で起こすか次の次で起こすか考え中。

第六話：眠る世界神ー前編（前書き）

流英、寝ます。前後編に分かれることになりました。

第六話：眠る世界神一前編

流英が寝てから、六千二百万年ほど経った頃。
チルノはある程度気力を取り戻していた。それは持ち前の元気からか、もしくは決心からか、はたまたある種の諦めからかもしれない。
しかし特に娯楽など無いこの時代、出来る事といえば修行か会話ぐらいしかないので取り戻したところでやる事は変わらない。
まぁ逆を言えば、年月が過ぎる＝強くなるが成り立ちやすくなる訳だが。
何が言いたいかと言えばもちろん、三人とも強くなったと言うことだ。
三人はそれぞれ上手いことが違うので教えあったりしているのもある。
チルノは主に戦闘技術、教えを受けた術式だ。自分なりの改造を加えている事も多く、偶によく分からないことを教えたりするが……
大妖精は主に家事と言語。後、実は軽くだが魔力を使った行動も出来たりする。魔力に溢れた場所限定だが、瞬間移動も出来たりする。
ルーミアは大体が説明を受ける側だ。しかし、元の世界の言葉やらを教えたりすることもある。そうそう使わないので無駄だが。
結果、三人とも大体のことなら出来るようになった。無駄になることも多いが。

「……んぅ……」

寝起きの目にはきつい太陽の光が入り込んでくる中、布団から顔を出したのはチルノ。
寝巻きなんてないので、下着姿のチルノは冷たい木の廊下を歩いて神社の外へ出る。途中、普段着を取りに行ったりしながら。
そのまま神社の近くにある広い草原まで来る。自然のまま放置されている草に光が当たり、眩しい。
多少周りを確認してから、自分の能力である『冷気を操る程度の能力』によって氷の剣を作り出す。
ここに居候し始めてから、流英の指導も受けつつ練習した結果、かなりまともな形の剣を作り出せるようになった。
ついでに、かなり硬い。さすがに術式でコーティングされた流英の木の剣ほどではないが。
まぁもちろん氷は氷、太陽の熱には耐えられないので、修行が終わったら手がびしょ濡れになってたりする。

「ふっ、はっ」

それなりに長くて重いその剣を、まるで踊るかのように華麗に振り回すチルノ。
だがしかし、それをチルノは喜べない。流英に見せなければいけないと、もはや本人にすら謎の執念があるからだ。
無表情、だかしかしどこか寂しそうなチルノの様子が、それを物語る。

大分日が昇ってきた頃。既に朝食は取り、今度は三人で術式の練習をすることにする。
とは言うものの、ルーミアは自分で習得してもらうしかないので

実質二人なのだが。
チルノも大妖精も、魔力の精密操作はお手の物だ。後は練習か、自分で応用して新しく式を作り、できることを増やす程度しかすることが無い。
ルーミアは、大分苦戦していた。攻撃的、例えるならば落ち着きの無い妖力は、精密操作に向かないのだ。
それでも一応、基本的な式はできるようになっているあたり凄いと思うが。

「……！　ねぇ、大ちゃん、ちょっと試したいことがあるんだけど」
「あー、ごめんね、ルーミアちゃんに手伝ってもらって？　ちょっと集中したいから……」

大妖精は申し訳無さそうに、けれど式から目を離さずに言った。
ということでチルノはルーミアにも同じ様に頼む。

「ん、別にいいけど、代わりに私のも手伝ってくれないかしら？」
「分かったわ」

とまぁ、こんな感じで時間は過ぎていき……

やがて夜になる。妖精、妖怪なので何も見えないわけではないが、それでも暗い。
もともとこの世界に居たチルノや大妖精はともかくとして、もともと別世界に居たルーミアとしては複雑だった。
まぁもちろん、やることもないのでそのまま寝る。

そんな生活を続けていた。

確か流英が寝てから一億三千万年ぐらい経ったと思う。そんなある日の事だった。
珍しく三人で散歩に行くことになった。前回に行ったのは何時だったっけ？二百万年ぐらい前だと思う。
と、まぁそんなに経てば大分変わるわけで。あたいたちは、前は見れなかったものをたくさん見ることができた。
一番大きかったのは、妖怪が居たこと。ただ、ルーミアみたいに喋れないみたいだけど。
……と思っていた。

「これからよろしく頼む」

でも、何故かこうなった。

事の始まりは、山に立ち入った時だ。
そこでは、ルーミアのような気を放つ生き物が数多く存在した。
と、不意に大きな力を感じた。

「っ、危ない！」

ルーミアが大妖精の前に出る。ルーミアは、攻撃を受け止めていた。
そいつは、あたいたちみたいな形の妖怪で、受け止められたことに驚いていた。

「誰だ！」

あたいは思わず叫ぶ。

「それはこっちが言う事だ。他人の住処に勝手に入ってきたくせに」

が、そんなことを言われてしまう。

「……え？」

しかし、あたいは別のことで驚いた。

「喋った……？」

「そっちから話しかけておいて、それはひどくないかい？」

さっきのは、反射的に言ってしまっただけだ。まともな返答が来るとは……

「ともあれ、戦うのなら名乗っておこうかしら。あたいはチルノ」

「……へ？　あ、えっと、大妖精です……」

「ルーミアだよ」

「……まあいい。ならば俺も名乗ろう。この辺一帯の妖怪を纏め上げてる、義鋼天翼（ぎこうてんよく）だ。」

沈黙。短くも長くも感じた。妖怪を纏め上げることに驚いたせいもある。

「……いくよ！」

「いくぞ！」

言った瞬間、氷の剣と拳がぶつかり合った。

ちなみに、大妖精とルーミアは……

「……あんなに本気でやってるところに割り込む隙なんてないよね……」

「ですね……まぁ、現状一番強いのはチルノちゃんだし、いいとは思いますけどね」

離れたところからのほほんとしてたりする。

第六話：眠る世界神ー前編（後書き）

もう少し、早く書きたい……

今回は、結構短いです。その代わりの前後編ですが。

オリキャラ登場。その名も義鋼天翼。

どうなることやら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0414z/

東方幻実神

2011年12月5日23時55分発行